

# とっておきを届けたい 京都市図書館 司書のイチオシ！ (児童書・絵本)

1	中央	コペル君	『天動説の絵本』	安野 光雅／著	福音館書店	私たちは世の中の常識を、正しいことだと思いがちです。かつて、天が動いていると信じられていた時代がありました。当時はそれが正しいとされ、それを否定し意見を言うものは異端とされました。しかし今日では、天ではなく地が動いているということが正しいとされています。いま、自分が常識だと思っていることが、誰かの強い信念によって築き上げられてきたこと、またそれは常に正しいことではないということ、考えられる人間でありたいと、この本を読んで思いました。
2	中央	アカシア	『大きな木のような人』	いせ ひでこ／作	講談社	パリの植物園の植物学者の”わたし”と日本から来ている女の子”さくら”の交流を描いた絵本です。1本の花をきっかけに、そして多くの植物と触れ合ううちに少女の心がほぐれていく様子が伝わってきます。タイトルにもある「木のような人」とはどういう人なのでしょう。冒頭に「人はみな心の中に、一本の木をもっている。」とあります。自分だけの木を大切にしたいと思わせてくれる本です。
3	右京中央	H	『あさになったのでまどをあけま すよ』	荒井 良二／著	偕成社	“あさになったのでまどをあけますよ”という言葉ではじまる朝の風景が、ハッと目に留まる色鮮やかな絵で描かれた絵本です。窓の外は、いつもと同じ朝の景色だけど、“やっぱりここがすき”という言葉が印象的です。何気ない風景が広がり、何気ない毎日を過ごす…そんな繰り返しこそが幸せなんだ、と改めて知らされる一冊です。心にスーッと入ってくるメッセージが、今日も頑張ろうという気持ちにさせてくれます。
4	右京中央	Y	『旅の絵本 8』	安野 光雅／著	福音館書店	やさしい色彩の中、国々を旅するような、絵だけのシリーズです。8巻は日本。最初手に取るときは、日本各地のどこかにつかしい風景を楽しんで。2回目は、必ずどこかにいる「旅人」を探しながら。3回目は、細やかな絵をじっくりと(昔ばなしもかくれています)。最後は、あとがきで安野さんの思いを感じて。何度でもページを開きたくなる絵本です。
5	右京中央	Mads	『ペンギンきょうだい れっしゃの たび』	工藤 ノリコ／作	ブロンズ新社	ペンギンのきょうだい、おねえちゃん、ベンちゃん、ギンちゃんの3人だけで列車に乗って旅に出かけます。電車の中で食べるお弁当のおいしそうなこと！一緒に旅をしている気分を存分に味わうことができます。また、登場するのが良い人(動物?)ばかりで、こちらもほんわりと温まります。見れば見るほど発見があり、笑みがこぼれる楽しい絵本。続編の『ふねのたび』『そらのたび』『バスのたび』も幸せがたっぷり詰まっていますよ。
6	右京中央	そら	『たいせつなこと』	マーガレット ワイズ ブラウン／さく うちだ ややこ／やく	フレーベル 館	“あなたは あなた あかちゃんだった あなたは からだと ころろを ふくらませ ちいさな いちにんまえに なりました(略)でも あなたに とって たいせつなのは…”やわらかい言葉で書かれた静かな詩のな かに力強いメッセージが感じられます。大人にも読んでほしい1冊。 迷った時に読み返したり、卒業や新しい出発をむかえる人への贈り物 にもオススメです。
7	醍醐中央	ころん	イソップものがたり 『ライオンとねずみ』	ジェリーピンクニー／ 作 さくま ゆみこ／訳	光村教育図 書	ふくろうから逃れうっかりライオンの背に乗ってしまったねずみ。ねずみを逆さにしながらライオンは逃がしてやりました。人間の罠にはまり、網で木に吊り上げられてしまうライオンをねずみは網を噛み切り逃がします。みずみずしい絵、立派なたてがみを持ったライオンが躍動感にあふれています。 弱いものを殺さなかつたライオン、勇気を出して助けたねずみ、弱いものが時には強いものに勝るといってお話です。
8	醍醐中央	なじ	『コートニー』	ジョン・バーニンガム／ 作 谷川 俊太郎／訳	ほるぷ出版	雑種でだれも飼いたい人のいないおじいさん犬のコートニー。子どもたちに気に入られてある家族のもとで暮らすことになりました。家事や子育てをはじめ、犬とは思えないほどの活躍ぶりがトボけた表情、ユーモアに富むタッチで描かれて、この絵本の一冊の見所と言えそうです。そのあとお話はすこし切なく終わります。犬好きの方やベントを飼ったことのある方ならなおさら胸にひびくものがあるでしょう。 子どもから大人まで幅広い年代の方におすすめです。
9	醍醐中央	こん	『こんとあき』	林 明子／さく	福音館書店	小さい頃持っていたぬいぐるみが動いたり、一緒に話せたら楽しいだろうなという思いが表現された絵本だと思います。電車に乗っておばあちゃんの家に行くことになって、ぬいぐるみのこんはあきを一生懸命リードしますが、旅の途中でこんが犬に連れ去られてしまいます。そのピンチを乗り越える時にあきの成長も感じることができる、心が温かくなるお話です。
10	醍醐中央	あひるのダック	『にじをみつけたあひるのダック』	フランセス・パリー／作 おびかゆうこ／訳	主婦の友社	雨を心配しながら「とつとこぱたぱた」と家に急ぐあひるのダックが最後に見つけたものは…？扇形の珍しい形と鮮やかな色が目を引きリズムカルな言葉でページをめくっていくのが楽しい絵本。子どもが小さいときには何度も「よんで～」とせがまれたお気に入りの一冊です。最後に現れるきれいな七色の虹がとっても素敵な絵本です。
11	地域図書館	すが	『子うさぎましろのお話』	ささき たづ／ぶん みよし せきや／え	ポプラ社	白うさぎの子「ましろ」は、クリスマスにサンタクロースのおじいさんからのおくりものをもらいましたが、まだもつとほしくなつてうそをついてしまいます。その子どもらしいうそに気づきながらもやさしく見守るサンタクロースがましろに渡したふたつのおくりものとは？独特のタッチで描かれる可愛い絵にもぜひ注目してください。思い出すたびに何度も読みたくなる絵本です。

12	地域図書館	Koge	『ちいさいおうち』	バージニア・リー・パートン／文・絵 石井 桃子／訳	岩波書店	夏に咲くひなぎくの花、秋には赤く染まる木立、夜はお月様が見える丘のちいさいおうち。自動車や地下鉄が走り、暮らしが豊かになるにつれ、自然がどんどん消えていきます。お日様の光が見えない季節も感じられない、町は便利だけれどちいさいおうちには居心地はよくなくて… 忘れたくない土の匂い・花や緑の香りと空の青さ。騒がしくなく、静かに心を落ち着かせてくれるもの…「こういうのが好き」と、読むごとに大好きになる本。きれいな青い表紙が印象的です。
13	地域図書館	うに	『トウトとパドル ふたりのすてきな12か月』	ホリー・ホビー／作 二宮 由紀子／訳	BL出版	“一緒にいる時も、離れているときも、ずっと君のともだち” トウトとパドルは、大の仲良しで一緒に暮らしています。だけど性格はまるっきり正反対。ある日、トウトが世界旅行に行くことに。「パドルも来る？」「うん。ほく、行かない」…というわけで、トウトは旅行に、パドルは一人で家にいることになりました。 二人がどこにいても仲良く、そして自分らしく過ごす、すてきな12ヶ月です。
14	地域図書館	パロ	『天動説の絵本』	安野 光雅／文・絵	福音館書店	安野光雅の絵が好きで手に取った本である。絵本という分類にはなっているが、これは科学の本でもある。細部まで書き込まれている絵で、天動説時代の考え方や生活がわかり、(魔王狩りや錬金術も登場)何度でも読み返したくなる。1979年の初版から35年以上ロングセラーを続けるこの本は、子供から大人まで楽しめる。
15	地域図書館	お多福	『最初の質問』	長田 弘／詩 いせ ひでこ／絵	講談社	日々の暮らしの中で、何となく見過ごしていたことが、どのくらいあるのでしょうか。真っ直ぐな言葉の質問が、最初のページから最後のページまで繰り返されています。改めて問われてみないと意識しなかったことや、想いを言葉にする難しさにも気づかされます。ページごとに描かれている淡く柔らかな色合いの水彩画は、答えを導いてくれているかのようで、絵画として鑑賞する心地よさもあります。折に触れて読み返したい一冊です。
16	地域図書館	絵本も大好き	『ルリユールおじさん』	いせ ひでこ／作	理論社	ルリユールとは本の製本、装幀の手職人のことです。舞台はパリ、大切な本が壊れて途方にくれている少女が街の人に「ルリユールの所に行ってください」と教えられる場面から始まります。絵本だからこそ伝わる手仕事のひとつひとつ、時の流れ。作者の伊勢英子さんは後書きで記しています。旅の途中で逢い惹かれたのは「書物」という文化を未来につなげようとする、最後の手職人の強烈な矜持と情熱だった、と。忘れられない一冊です。
17	地域図書館	F	『のにつき -野日記-』	近藤 薫美子／著	アリス館	1匹の親イタチが死に、その傍らで子イタチが呆然とし鳴き声を上げている場面からお話が始まります。晩秋から冬、そして春へと時間が流れていく中で、イタチや野の生き物達がどのように変化していくのがリアルに、かつユーモアを含めながら描かれています。写実的な絵や、残酷に感じられる内容に衝撃を受けられるかもしれませんが、自然や命の美しさが伝わってくる絵本です。
18	地域図書館	ちこ	『でこちゃん』	つちだ のぶこ／作・絵	PHP研究所	日曜日、お母さんに髪を切ってもらったら、でこちゃんになった。でこちゃんは、恥ずかしくて買い物にも行きたくない。次の朝、鏡を見ると、おでこはそのまんま。「幼稚園に行きたくない」と、泣いていたら「チチンプイプイのプイ！」お姉ちゃんのおまじないが効いたみたい！この本を読むと、幼い頃、父に散髪してもらったことを思い出します。ほのほのと心温まるおすすめの一冊です。
19	地域図書館	ブックレンジャー102号	『ずーっとずっとだいすきだよ』	ハンス・ウィルヘルム／絵・文 久山 太市／訳	評論社	主人公の男の子は犬のエルフィーと一緒に大きくなりますが、エルフィーの方が先に年を取り動けなくなります。男の子は死んでゆくエルフィーに「エルフィー、ずーっとだいすきだよ」と言ってあげていたので、エルフィーが死んだ後も少し気持ちが楽でした。相手が人でも動物でも思やりの言葉と愛情を注ぐことの大切さを教えてくれる一冊です。
20	総務課	まーちゃん	『まあちゃんのながいかみ』	たかどの ほうこ／著	福音館書店	幼稚園の頃、「まーちゃん」と呼ばれていたショートカットの私は長い髪を三つ編みにしている友達のことをとてもうらやましく思っていました。小学生から髪を伸ばしはじめ、中学生になると腰に届くほどになりました。この本では、長い長い髪の毛を使った豊かな想像の数々が絵とともに楽しめます。私はもう「ながいかみのまーちゃん」ではありませんが、読み返すといつも長い髪に憧れた幼い自分を懐かしく思い出します。
21	総務課	マンゴーラッシー	『もりのかくれんぼう』	末吉 暁子／作 林 明子／絵	偕成社	お兄ちゃんを追いかけて見知らぬ森に迷い込んだけいこが出会ったのは…。 描かれた錦秋の森が美しい。内容は「子どもが異世界に行って交友し、後に戻ってくる」という日本古来の説話の系譜と言える。「夕暮れ時」「かくれんぼ」等、異世界の入口を巧みに用意し、その世界は大人の登場によって突如として消失する。目覚めたけいこの握りしめていた物がなんとも悲しい。

# とっておきを届けたい 京都市図書館 司書のイチオシ！ (児童書・絵本以外)

22	中央	阿波百合	『アラスカ光と風』	星野 道夫／著	福音館書店	アラスカの動物写真家、星野道夫さんが亡くなってから今年で20年。私がこの本と出会ったのは、中学2年生の時です。日本からはるか遠い国アラスカで生きる先住民の生き様やカリブーの大移動、クジラ漁やオーロラを求める旅路…。この本に込められた星野さんの言葉と写真は中学生だった私の心を揺さぶり、果てしない世界の広大さと素晴らしさを教えてくれました。この機会にぜひ星野さんの本に触れて、新たな世界への扉を開いてみてください。
23	右京中央	TM	『ストグレ！』	小川 智子／著	講談社	空手が大好きな小5の女の子、光希。引越先で新しい道場入門するも、看板はボロボロ、師範はジャージ姿でやる気なし。道場生は体の弱い小2の翼と、両親との関係に悩む小3の礼奈だけ。転校先では空手が乱暴だと誤解され孤立する毎日。それでも光希は困難にまっすぐに立ち向かいます。「ストグレ」とは、勇気が湧いて力がみなぎる魔法の言葉。意味が気になる人はぜひご一読を。読後はきっと、脱いだ靴を揃えたくなるはず。
24	右京中央	i	『マツの木の王子』	キャロル=ジェームズ／作 猪熊 葉子／訳 セビン=ウネル／画	フェリシモ	マツの林の中に、ある日シラカバの少女が迷い込みます。他のマツたちは突然、自分たちの世界に入り込んできたシラカバの少女を追い払おうとしますが、マツの木の王子は、シラカバの少女に惹(ひ)かれていきます。このお話のテーマは“愛”だと思います。話が進んでいくうちに、この作品から、あらゆる愛の形を読み取ることができます。最後までとても印象的なお話です。
25	右京中央	momo	『アイスマン 5000年前からきた男』	デイビッド・ゲッツ／著 赤沢 威／訳 ピーター・マッカー ティーター／画	金の星社	1991年、イタリア・オーストリア国境付近にあるアルプスの氷河から発見された死体は、思いのほか保存状態の良いミイラでした。アイスマンと名付けられたこの死体や散乱していた遺物から、一体何がわかるのか？何を語ってくれるのか？法医学、考古学、人類学、あらゆる科学者たちが、多くの時間をかけ謎を解き明かしていく様子はノンフィクションならではのワクワク感があります。大人も子どもも楽しめる一冊です。(＊その後、科学の発達と共に諸説があります。)
26	右京中央	S	『大草原の『小さな家の料理の本』 ローラ・インガルス一家の物語から』	バーバラ・M・ウオーカー／文 ピーター・マッカー こだま ともこ／共訳	文化出版局	食いしんぼうの子も多かったんだと思います。『大きな森の小さな家』に出てくる様々な食べ物！メープルシュガーにお肉の燻製、コーンミールのパン…どれもとても印象的でした。大学生になってからこのお料理の本を図書館で見つけました。開拓者の暮らしぶりや当時の食材などについても触れられていますし、1冊のお料理の本としても、もちろんとても楽しめる1冊です。
27	伏見中央	月うさぎ	『点子ちゃん』	野田 道子／著	毎日新聞社	泉川カレンのあだ名は「点子ちゃん」。色白で妖精のような全盲の女の子です。点子ちゃんは、点字でたくさんの本を読んでいます。小学4年生の上野一平のクラスに転校してきた彼女は、いつも笑顔で明るくクラスの人気者になります。点子ちゃんをめぐり、優しさあり、勇気あり、涙あり…。あらためて、点字の大切さを考えてみませんか。
28	伏見中央	N. M	『負けるな、ロビー！』	マイケル・モーパゴー／作 佐藤 見果夢／訳	評論社	交通事故にあい、生命維持装置につながれて生きている10歳の少年ロビー。 「目を覚まして、ロビー。お願い」 家族や友達が呼びかけても、ロビーは返事もできない。でもみんなの声は聞こえてるし、みんなの手のぬくもりを感じている。もっとほかに話しかけて。前みたいに。もっとそばにいて。ロビーは人知れず、この世に戻ってくる戦いを続けていた。ロビーをめざめさせたのは、いったい何だったのだろうか？
29	醍醐中央	あんこ	『優しさごっこ』	今江 祥智／著	理論社	ごっこ・ごっこ・おにごっこ。ほかにもいろいろあるけれど、京都の街並みを背景にかあさんが出ていったあの日から小学生のあかりがせいっぱい、おとなの優しさを演じてくれる。いつかその優しさが心の糧になりますように。続編『冬の光』
30	醍醐中央	K	『扉のむこうの物語』	岡田 淳／著・絵	理論社	出版年が1980年とは思えないくらい、今読んでもすーっと入ってくる物語です。 映画化しても面白そうなファンタジー作品。 主人公行也(ゆきや)は小学6年生。物語を書く宿題を考えるために学校の倉庫に。 そこにあつた小道具の扉をあけると不思議な世界へ入ってしまいました。鷲が喋ったり、人々が分類されていたり…。行也はもとの世界に戻れるのか…。ワクワクしながら読める1冊です！
31	醍醐中央	菜摘	『天と地の方程式』1	富安 陽子／著	講談社	小中一貫校に通う八年生の田代有礼(ありのり)ことアレイとクラスメイトの厩舎修ことQは突然猿の口から天ツ神のメッセージを聞いた。「黄泉ツ神(よもつかみ)が目覚めた。七柱ノカンナギヲ集メテカラヲ揃エ、黄泉ツ神ヲ地ノ底ヘ封ジヨ」 三柱のカンナギはアレイ・Q・猿。あと四柱のカンナギは誰？果たして七柱は黄泉ツ神との戦いに勝てるのか？緊迫感あり・笑いあり読者を飽きさせることのないストーリー展開。読みだしたら止まらない。富安ワールド全開の作品(3部作)

32	地域図書館	Y	『郵便屋さんのお話』	カレル・チャベック/作 関沢 明子/訳 藤本 将/画	フェリシモ出版	このお話は祖母に買ってもらった絵本の中の一冊でした。真夜中の郵便局の中で、手紙をトランプの札のようにして強さを競う場面や、一通の手紙を配達する郵便屋さんが次のページも次のページも届けられなくて、ドキドキした気持ちが今も懐かしく思い出されます。小さい頃に、何度も何度も読み返した絵本でした。買ってもらった絵本は絶版になっていたのですが、この作品が出版された時はとても嬉しかったです。
33	地域図書館	H	『ポケット詩集』1・2・3	田中 和雄/編	童話屋	みなさんは心に残っている詩がありますか。私には数多くあります。そんな私の好きな詩を多く収められているのが、『ポケット詩集』全3巻です。収められているのは、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」や最近話題になった吉野弘の「祝婚歌」など、聞き覚えのある詩ばかりです。この本はいつでも読みたいので、買って手元に置いています。皆さんも図書館でそんな出会いをしてくださることを願っています。
34	地域図書館	K	『知ってる？正倉院一今なおかがやく宝物たち』	奈良国立博物館/監修 読売新聞社/編集	ミネルヴァ書房	奈良時代、光明皇后の思いやりの心から東大寺に納められた聖武天皇ゆかりの品々。これらの正倉院宝物は1250年以上もの間、たくさんの人たちの努力によって守り伝えられてきました。これほど古い宝物が、現在でも美しいままの姿を見せてくれるのは世界でも正倉院だけです。この本を読んで、毎年秋に開催される正倉院展で本物の素晴らしさにふれてみてください。その魅力にとりつかれることでしょう。
35	地域図書館	K. S	『はてしない物語』	ミヒヤエル・エンデ/著 上田 真而子/訳 佐藤 真理子/訳	岩波書店	私が注目して欲しいこの本の魅力は、「けれどもこれは別の物語、いつかまた、別れのときにはなすとしよう」という繰り返し使われるフレーズ。物語の中でまた別の物語が生まれてくるというこの言葉の真価が発揮されるのは読後。あなたが主人公セパンスチアンと共にファンタジーエン(この物語の世界)から現実に戻ったときに、自分の周りにも同じく「はてしない物語」が広がっていることを実感させてくれるはずです。
36	地域図書館	平澤 鼎	『クオレ(少年少女世界文学館22)』	エドモンド デ アミーチス/著	講談社	私が、この本に出会ったのは、小学生になる前のことである。戦中を教師として生きた母の朗読により、私は抵抗なく、この本の主人公エンリコを受け入れ、小・中学生時代を過ごした。また、私は、彼の日記にあるように友人と遊び、親友を信じ、先生を敬い、親を手本にした。130年前のイタリアの小学4年生エンリコに違和感はない。あるとすれば、生きにくい今の世であろうか。いや、彼の時代もそうだった。それを乗り越える様を彼の日記から読み解いてほしい。
37	地域図書館	M	『くろねこのどん』	岡野 かおり子/作 上路 ナオ子/絵	理論社	えみちゃんが心細くしているときに、ぱつとあらわれるねこの「どん」。そんなねこ達との楽しい日々のお話です。いたずらっ子で弟のようで妖精みたいな「どん」が話す「言葉」が、この本をおススメしたいところです。大事件が起こるわけではない、おだやかな物語ですが、年齢に関係なく読んでみてほしいです。
38	地域図書館	Chloé	『十一月の扉』	高樓 方子/著	リブリオ出版	中学生の爽子は、2か月間だけ親元を離れて「十一月荘」という白い洋館で暮らすこととなります。個性的で思いやりあふれる大人の女性達との充実した毎日の中で、爽子は何かステキなことを始めたいと思いつちます。そのステキなこととは…?「十一月には扉を開け」という言葉がとても新鮮でした。秋愁を覚える季節ですが、この本を読むと背すじがピンと伸びて前向きな気持ちになります。晩秋の、冷たく清々しい空気を感ずるお話。
39	地域図書館	秋川 孝美	『はてしない物語』	ミヒヤエル・エンデ/著 上田 真而子/訳 佐藤 真理子/訳	岩波書店	映画の原作としても知られているが、全く違う深い内容の作品。主人公が本の中の世界へ入りその崩壊を救うのもわくわくするが、現実世界へ帰れなくなりそうになり、「最後の望み」として「愛すること」を望み、ファンタジーエンの友人に助けられて現実へ帰っていく後半がすばらしい。また、主人公が手にとったのと同じあかがね色の布張りの美しい装丁、二色に刷り分けられた文字、この本は物語と一体となって芸術品となっている。
40	地域図書館	C	『復活の日』	小松 左京/原作 新井 リュウジ/文	ポプラ社	タイトルに覚えがある人もいるのではないのでしょうか？原作は小松左京。時代背景を現代に合わせ修正し、文章も中高生向けに読み易くしたのですが、大人でも充分読みごたえがあります。事故によりばら撒かれた細菌兵器でみるみるうちに地球上のあらゆる生き物が滅亡していく…。南極に残された人々が人種を超え、困難に立ち向かい懸命に生きていく姿に思わず引き込まれます。後書きに書かれた小松氏の思いも読んでみてください。
41	地域図書館	くまさん	『みしのたかくかにと』	松岡 享子/著	こぐま社	【みしのたかくかにと】このタイトルって、おまじない？呪文？読まずにはいられませんよね。ふとつちよのおばさんは、ある日台所で黒い小さい一粒の種を見つけました。何の種かわからないけれど【とにかくたのしみ】と書いた立て札を立てて種を植えました。やがて芽が出て大きくなった頃、この国の王子様が立て札を見て『へんなの』と思いました。そして王子様は…黒い小さい一粒の種から巻き起こる楽しいお話。大人になっても忘れられない一冊です。
42	地域図書館	ブックレンジャー101号	『子犬工場』	大岳 美帆/著	WAVE出版	ここから出ると言わんばかりにペットショップのゲージの中にいる子犬たち。売れなくて里親も見つからない、長期旅行で犬の面倒が見れないというただそれだけの理由で簡単に愛護施設に預けられたりする犬がいるということを知りました。そして、彼らの命は私たちのエゴで消えゆくことになりかねないことを、ペットも家族の一員なのです。だから売る人たちも犬を飼う人たちも、ぜひ一度この本を読んで彼らのことを考えてみてください。

43	総務課	100年のねむり	『孔雀のパイ』	ウォルター・デ・ラ・メア ／詩 まさき るりこ／訳	瑞雲舎	デ・ラ・メアの詩を読むと、子どもの頃の記憶が蘇る。寝室でひとり寝かされていた私は、窓を揺する不自然な音で目を覚まし、怖くなって母を呼んだ。どうも台風の前触れだったようだが、私はてっきり闇に紛れて何者かが自分をさらいに来たと思い込んだ。子どもだけが感じ取るあの“怖さ”の正体を、私は詩人の言葉の中に見つける。「見えないけれど気配を残すものたちは確かに存在するのですよ」と。夜の静けさの中で読むと格別。
44	事業館	T	『狐笛のかなた』	上橋 菜穂子／著	新潮社	〈守り人〉シリーズで有名な上橋菜穂子さんの作品です。人の心の声が聞こえる〈聞き耳〉の才を持つ少女・小夜と、使い魔にされた霊狐・野火、そして、屋敷に閉じ込められている少年・小晴丸の物語。児童文学として出版された本ですが、大人でも十分に楽しめる作品です。ファンタジーが好きな方も、そうでない方も、ぜひ一度読んでみてください。

# とっておきを届けたい 京都市図書館 司書のイチオシ！ (一般書・文学以外)

45	中央	K.M	『医学不要論』	内海 聡／著	三五館	現代医学とは一体どのようなものなのか？現役の医師である著者が真っ向から現代医学のウソに立ち向かいます。健康に関する本は巷にあふれており、インターネット等では様々な情報を得ることができます。何を信じ、何を信じないかは自らが調べることでしか真実にはたどりつけないと、突き放すような厳しさの中に、ウソ偽りのない人間性を感じます。
46	中央	てんてん	『カメラを持って、町へ出よう』	想田 和弘／著	集英社インターナショナル	事前リサーチをせず、ナレーションや説明テロップ、BGMを使わない「観察映画」というユニークな方法を実践するドキュメンタリー映画作家、想田和弘氏による観察映画論。彼の製作スタイルは、世界をどう観て、どう受け止め、どう生きるかということ深く追求することによって生まれた方法です。意識して、世界をよく観て、聴いて、観察してみると、普段はあたりまえだと思っていた風景が、全然違うものに見えてくるかもしれません。
47	中央	一期一会	『日本おとぼけ絵画史』	金子 信久／著	講談社	日本絵画といえば、荘厳な屏風絵などを思い浮かべるが、この本は表紙の絵からしてとぼけている。福耳のぼっちゃりしたおじいさんらしき人物が頭の上で皿回しの曲芸をしているのである。絵の線も頼りなさげで、絵のゆるさを強調している。この人物は七福神の布袋様であるというから驚きである。私の好きな絵は98ページの絵で、ゆるキャラに通じるものがある。この本は見るだけでも楽しいので、ぜひなごんでお気に入りの絵を見つけていただきたい。
48	中央	みかん運搬船	『この世界の片隅に』上・中・下	こうの 史代／著	双葉社	海辺の町の冬、ふしぎなおとぎ話のように始まる物語 各話ごとのオチにくすりと笑われ、ほわっとした絵柄になごみますが、その向こうに古いモノクロ写真の中に閉じ込められていた70年と少し前の世界が、しっかりとした手触りと親密さをもって現れてきます。この時代、この町でふつうに暮らすことのいとおしさ。誰かからの手紙をそつと開くように手に取ってほしい。そんな思いを抱く本です。
49	中央	むっつい	『毎月新聞』	佐藤 雅彦／文	毎日新聞社	教育番組「ピタゴラスイッチ」などを手掛けている佐藤雅彦氏が1998年から2002年の4年にわたり「毎日新聞」で連載された月1コラムを書籍化。見開きが1つの新聞となっていて、どこから読んでも良いのも魅力のひとつ。著者の独自の視点や発想、考察はとても興味深く「三角形の内角の和が180°であることの強引な証明」、「基本は大人になってから」の円周率=3.14の話題は目から鱗。著者の鋭い感性が脳に良質な栄養を与えてくれる、そんな感じの一冊です。
50	右京中央	M	『昭和に学ぶエコ生活 ～日本らしさにヒントを探る～』	市橋 芳則／著	河出書房新社	ネットや電化製品が普及し、電子レンジや自動改札機をはじめ何でも便利でスピーディになった、でも何だかせわしない今日この頃。便利さ・スピードを追求した結果、インスタント思考の人が増えた気がしませんか？この本は、ヘチマ、湯たんぼ、重書、はたき、打ち水など、現代にも活かせる昭和の日本らしい知恵を紹介しながら、ギスギスした現代社会、雑多な日々の中にいた自分にふと気づかせてくれ、ほっこりした気分を味わせてくれる1冊かもしれません。
51	右京中央	C	『新訳 茶の本』	岡倉 天心／著 大久保 喬樹／訳	角川書店	『茶の本』は思想家岡倉天心が外国人に向けて日本文化を紹介するために英語で著した本です。初版は1906年なので、今年でなんと110年！ここまで読み継がれてきたのには、ワケがあります。「日本とは」また「日本人とは何か」を改めて見つめなおす、よいきっかけを与えてくれる一冊です。訳本がたくさん出ていますが、初心者はずからがおすすめ。他の訳本と読み比べてみるのもいいかも。新しい発見があるかもしれません。
52	右京中央	桜橋	『平安京図会』	京都市生涯学習振興財団／企画・制作ほか	京都市生涯学習振興財団	平安建都1200年を記念して作製された「平安京復元模型」の解説と、平安宮(大内裏)及び周辺の史跡を紹介したガイドマップです。「平安京復元図」には、現在の京都に平安京(主な施設・邸宅名記載)を復元し重ねられており、自身の家や学校・職場が平安時代はどんなところだったかを見るのに役立ちます。また、平安宮周辺のイラストマップもついており、実際に散策する際にも便利です。いにしへの都にタイムスリップしてみませんか。 ※「いにしへ」は「いにしえ」の旧仮名遣い
53	右京中央	子口	『都の数えうた』	京都新聞社／編	京都新聞社	一口(いもあらい)、三年坂、四神、五山の送り火、六斎念仏、京の七口(ななくち)、八ツ橋、九条ねぎ、十日えびすなど、京都に関する事項の内、数にちなんだものがまとめられています。一から百、千、万、さらに無まで、よく集めたなあと思いますが、ここまで揃うと面白いです。一味違う切り口で、京都の歴史や文化、史跡、街並みなどを見てみませんか。また、ミニ辞典としてこの1冊を覚えれば、あなたも京都通です。
54	右京中央	N	『国史大辞典を予約した人々』	佐滝 剛弘／著	勁草書房	『国史大辞典』字面も真黒な見た目(装幀)も厳めしい全17巻の大部の書ですが、中身はとても懇切丁寧。多様な図表にわかりやすい解説で司書にとって頼りになる日本史の辞典No.1です。そんな辞典の明治41年に刊行された初版をわざわざ予約して購入したのはどんな人々だったのか。予約者芳名録には、与謝野晶子、金田一京助、北垣国道に田辺朝郎など作家や学者、政治家に科学者まで有名人が目白押し。歴史辞典の大本山を巡る人々の物語です。
55	伏見中央	椰(ナギ)	『イラストで見る 昭和の消えた 仕事図鑑』	澤宮 優／文 平野 恵理子／イラスト	原書房	昭和生まれの私には、見聞きした仕事がたくさん載っていた。京都駅に着くと利用した[赤帽]や近所によってきた[ロバのパン]、四条河原町の角に立つ[サンドイッチマン]など。ただ[鉛細工屋]がないのが残念である。いつか自分も作ってみたいと思っていたのに、教わる人がいない。見開きで一職業。左ページの味のあるイラストも楽しい。

56	伏見中央	たまご	『おからパーフェクトマフィン』	重野 佐和子／著	河出書房新社	マフィン。引き寄せられる、誘惑の四文字。おから。先人が遺してくれた、偉大な食材。おからマフィン。お腹まわりが気になる私には、まさに救済のスイーツ。各レシピをじっくり読み進めたら、頭の中は食物繊維でいっぱい。いろいろなおからマフィンの美しい写真に、小腹も満たされる(かもしれない)一冊です。
57	伏見中央	モコモコ	『なんたってドーナツ』	早川 茉莉／編	筑摩書房	誰にでも思い出の食べ物はあります。この本は、41人の作家たちのドーナツにまつわる楽しい話や懐かしい話、ほんわかとした心温まる話などが書かれています。ドーナツ好きの人はもちろん、おやつや甘いものが好きな人も食べることが好きな人にもおすすめです。そしてドーナツがあまり好きではない人も、ドーナツがちょっと食べてみたくなるかもしれません。
58	醍醐中央	ダンゴ・マルコ	『甲虫カチ観察図鑑』	海野 和男／写真と文	草思社	『コロナシギゾウムシ』——ドングリから生まれるのを娘と楽しみにしていたその虫を、この本で見た時の衝撃といたらなかった。「象さん」には似ていない。突き出た細長い口。小顔に大きすぎる目と縞々模様の高級タオルみたいにみっしり生えた胴部の毛。昆虫の第一人者が超クローズアップでとらえた写真はかなりの迫力だ。思わず悲鳴を上げる母の隣で「かわいい！」と娘は笑う。虫を愛することもたちにもおすすめの1冊だ。
59	醍醐中央	○	『目でみることば』	おかべ たかし／文 山出 高士／写真	東京書籍	まず表紙からインパクト大。本を開くと、タイトルの通り、よく耳にすることばと、その由来となったものが写真で紹介されています。知っているようで意外と知らなかったり、勘違いをしていたり。奥の深い由来の数々に驚かされます。また、著者こだわりの写真にまつわるコラムも、思わず「へえ」と唖ってしまうものから、クスッと笑えるものまでさまざまです。辞典とは違った面白さに、夢中になってしまいます。
60	地域図書館	東京オレンジ	『文・堺雅人』	堺 雅人／著	産経新聞社	ぶん系男子の真骨頂(実は早稲田の文学部出身)。 んー、まいりました！ さわり良くも自己主張する文体に、 かわらず仕事に向き合う姿勢に。 いつからか、ずっと好きな俳優ランキング不動の1位です。 まさかの役を難なくこなす。 さかさまとの頭の中とは？ とりこになること請け合いです。 (・・・実は「文・堺正人」もおすすめです。(こっそり)
61	醍醐中央	ミッキーマウス	『子宮頸がんワクチン、副反応と闘う少女とその母たち』	黒川 祥子／著	集英社	衝撃的な内容だが、この本は実話である。母親が大切な娘が将来「子宮頸がん」にならないようにするために選んだワクチンが、結果恐ろしい副作用となって娘を悲惨な姿に変えていく。しかし医師は副作用とは認めず、精神的なものという診断で片づけられる。組織ぐるみで副作用を隠滅し、ワクチン1本で、大切な娘の人生が狂わされるのである。この本は、娘を持たれる全ての方に読んでいただきたい1冊である。
62	醍醐中央	クーネル	『食べる私』	平松 洋子／著	文藝春秋	こういう人は一体どういう家に生まれ、どう生きてきたのだろう。そういう風に思わせる人が誰にでもいると思うのだが、この本は内容も興味深い、そのメンバー選びが抜群におもしろい。「このひとが食べものを語れば人間の真実に触れる瞬間がもたらされるのではないか」という作者の予感だけから選出されたユニークな人達。デーブ・スペクター、ギャル曽根、堀江貴文、高橋尚子、樹木希林など29人。子ども時代の食体験がひとを司っている事実の重さ。ぜひ読んでいただきたい本である。
63	地域図書館	えんどうまめ子	『園芸家12ヶ月』	カレル・チャペック／著 小松 太郎 訳	中央公論社	「いい土は、上等の料理と同じで、濃厚過ぎてもいけない。」美しい花を咲かせるために園芸家は毎日の毎月の手間ひまを惜しまない。季節ごとの自然の風景を美しく細やかに描きながら庭仕事のあれこれをユーモアたっぷりに語る。園芸だけではなく自然や人の生活について、さまざまな発見が楽しめる一冊。カルルの兄ヨゼフが書いた挿画も味わい深い。
64	地域図書館	ネコ型ロボ	『全力で生きる技術』	棚橋 弘至／著	飛鳥新社	著者は新日本プロレス所属のプロレスラーです。低迷していた新日本プロレスの人気復興に大きく寄与した選手のひとりです。プロレスを愛し、ファンを愛し、自分を愛する「100年に1人の逸材」は2児の父であり、ときどき小学校に読み聞かせに行くこともあるそうです。この本は失敗しても、壁にぶち当たってもひたむきに全力で生きていく棚橋選手の人生哲学です。プロレスファンでなくても一読の価値はあります。
65	地域図書館	尾白	『海馬が耳から駆けてゆく』	菅野 彰／著	新書館	タイトルの「海馬(かいば)」という言葉から、何やら難しそうな脳科学の本か？と思われる方もいるかもしれませんが、ご安心を。これは、ある女性作家による、家族や、愉快的仲間たちとの抱腹絶倒な日常を綴ったエッセイ集です。これだけ個性的な面々が集まるとは、さすが作家！と妙な納得をしてしまうエピソードの数々。そこには著者の周りの人たちへの愛情が溢れていて、こちらまで幸せな気持ちになります。
66	地域図書館	M.N	『拙者は食えん！ サムライ洋食事始』	熊田 忠雄／著	新潮社	ハンバーグなどの洋食がいまや国民食となった現代。日本にいながらにして世界中の料理や食材を目にすることができ、食のグローバル化はどんどん広がっています。しかし洋食と日本人の初対面は強烈だったようです。白米に魚、醤油と味噌の生活を続けてきた彼らにとって、こってりバターや匂いのきつい肉が、どれほど衝撃的だったか。江戸後期から明治にかけて、未知の食べ物・洋食と出会った日本人たちの笑い涙の奮闘の記録です。

67	地域図書館	かかし	『京都おもしろウォッチング』	赤瀬川 原平／著	新潮社	街歩きをするのが大好きです。そんなきっかけとなった本を紹介し ます。本書は、「路上観察学会」なるグループによる“京都街角ウォッチ ング”をレポートしたもので、日常のありふれた風景もよく“観察”して観 るとこんなに魅力的に見えるのと驚き、自分が住む街京都への愛着が 一層湧いた一冊です。出版から随分時間が経ってしまい、今はもう見 られない景色も沢山ありますが、2000年代の街角ウォッチングをどう ぞ。
68	地域図書館	うさこ	『ペニシリンはクシャミが生んだ 大発見』	百島 祐貴／著	平凡社	心臓ペースメーカーは靴墨の缶で作られた。最初の輸血は羊の血。 病原菌を自ら飲み込んでノーベル賞を受賞した医師…など、医学の 進歩の陰には驚きのドラマがたくさんあったという話が25編書かれて います。 読後は今の時代に生まれてきたことに感謝！でした。麻酔なしの手術 なんて考えられませんから…ね。
69	地域図書館	ムーミン	『フィンランド語が面白いほど身 につく本』	栗原 薫／マルユッ トウ・コウリ／共著	中経出版	海外旅行の際、その国で暮らす人々と話してみたいな。でも忙しくて、 習いにはいけないし、テレビの語学番組もない…。そんな時には、図 書館で語学の本を借りてみてはいかがでしょう。京都市の図書館に は、さまざまな国の言語に関する本があります。中にはCDがついてい る資料もあり、発音を学ぶこともできますよ。ちなみに私には、この本 がぴったりのテキストでした。
70	地域図書館	りん	『街の木のキモチ』	岩谷 美苗／文・写真	山と溪谷社	街中でふつうに見かける街路樹や庭木たちのキモチ！を、樹木医で ある著者が読み解いていきます。地蔵木、巨乳木、飲みすぎ木、社長 木、脱獄木、怪獣木、寝癖木など、ユーモラスなネーミングで紹介さ れている木々の写真に、これまた軽妙なイラストが添えられ、街中で懸 念に生き抜こうとしている木々たちの生態が、とても分かりやすく書か れています。そのネーミングどおりのありように、はたと膝をうち、感嘆 しながら目からウロコが落ちますよ。
71	地域図書館	N子	『世界屠畜紀行』	内澤 旬子／著	解放出版社	お肉は好きですか？私は大好きです。でも、身近な食肉がどのような 過程をへて私たちの食卓に並ぶかを詳しく知っている人は少ないの ではないでしょうか？現代日本において動物が食肉になる場面は多くの 人が目に触れられません。本書は素朴なイラストで、わかりやすく世 界の「屠畜」に関する事柄を知ることができます。やや、著者の主観的 な記述が気になる箇所もありますが、肉を「食べる」ということについて 考えさせられる一冊です。
72	地域図書館	sakosako	『流転の王妃の昭和史』	愛新覚羅 浩／著	中央公論新 社	第二次大戦中、侯爵家の令嬢に生まれ、旧満州国皇帝の弟に嫁ぎ た浩（ひろ）。政略結婚でありながら、誠実な夫との幸せな生活は終戦 で一変する。中国大陸での逃避行、夫の安否不明、長女の死…。そし て長い長い時をへて再会した夫婦は…？まさに「流転」の人生を、運 命に翻弄されながらも凜として生き抜いた女性の自伝です。夫、溥儀 の「溥儀自伝」と共に読むと、それぞれの目から見た昭和史が浮かび 上がってきます。
73	地域図書館	RORO	『茅田砂胡全仕事1993～2013』	茅田 砂胡／著	中央公論 新社	その名の通り、茅田砂胡さんのシリーズなど、作者の魅力がたくさん 詰まった本です。特に、『紅蓮の夢』に出てくるデルフィニア戦記から トゥルークの海賊がお薦めなのですが長編です。また、絞り込めず、こ の本を選びました。お気に召したら読んでください。はまってしまっ たら大変な事に成ります。実は私もその一人で、友から数年前に薦め られ、一番好きな作者になりました。
74	地域図書館	BAU	『もっと知りたい伊藤若冲 生涯 と作品』	佐藤 康宏／著	東京美術	今年生誕300年を迎えた伊藤若冲。『動植綵絵』のカラフルな花や鳥 達、『白象群獣図』の柘目描きの技法、『百犬図』のユーモラスな子犬 達、水墨画と版画に見る単色の世界、石峯寺の表情豊かな石像群 等、斬新で個性豊かな作品を生誕に沿って配列し、様々な角度からわ かりやすく解き明かす。エピソード、ゆかりの人々、若冲を訪ねる京都 マップ、若冲作品を所蔵する施設リストも掲載。若冲の作品と生涯を 知り楽しむための入門書。
75	地域図書館	ゆず	『おいしいものまわり』	土井 善晴／著	グラフィック 社	料理研究家の著者が、食材や家庭料理などについて綴った随筆。写 真も綺麗で楽しい本だが内容が濃く、読み進むにつれ、食が人のあり 方や文化をつくっていくと実感する。「昔は『座って食べなさい』と親か ら叱られ、遊園地でアイスクリームを買えばまず椅子を探したものだ が、今では食べながら歩くことに違和感がなくなってしまった。日本 人の美德として、意識的に残しても良いのでは」と提案する著者。おい しいレシピを追うだけではない食まわりの大切さを思う。
76	地域図書館	レゾンデタ	『古典外交の成熟と崩壊』	高坂 正堯／著	中央公論社	戦後日本を代表する国際政治学者・高坂正堯の学問的原点である、 19世紀のウィーン体制を論じた本書は、すぐれて学術的なテーマ でありながら、平易な文体で書かれ、なおかつ随所に鋭い洞察が満ち 溢れています。とくに「遊び」や「余裕」などの理念に裏打ちされた「古 典外交」を優雅な筆致で描いた第3章「会議はなぜ踊りつづけたか」 は、まさに「力・利益・価値の体系」として把握する高坂の国際政治観 を象徴しており、この章だけでも一読する価値があります。
77	総務課	考えるセイウ チ	『幸福は幸福を呼ぶ』人生の知 恵235篇	宇野 千代／著	海竜社	著者は、98年の生涯で4度の結婚と離婚を経験し、10軒以上もの家 を建てたといわれる宇野千代氏。小説家でありながら、着物のデザイ ンを手がけたり、美業家の顔も合わせ持つその人生は、波瀾万丈そ のものですが、ただひたすら「幸せになりたい」と願う行動することが 生きづらいつ世の中を渡る知恵となることを体現しているようにも思えま す。人生の大先輩による珠玉の言葉の数々は、すべての女性を励まし ます力強いエールでもあります。
78	総務課	どすこいこ んたびりて	『フェルマーの最終定理』	サイモン・シン／著 青木 薫／訳	新潮社	ズバリ！数学の本。でも数学の知識は必要なし！ 3世紀以上前に生まれた「とある定理」。一見シンプルなのに、多くの 数学者を悩ませ続けます。様々なドラマが繰り広げられた末、ついに 解に辿り着いたのは、子どもの頃に図書館でこの定理と出会った、一 人の数学者でした。彼が手にした栄光の陰には、日本人数学者の功 績が大きく関係しています。 次はどんな物語が登場するのか…冒険小説のようにワクワクしながら 読める一冊です。

79	総務課	ぼたもち	『鳥山石燕画図百鬼夜行全画集』	鳥山 石燕／著	角川書店	江戸時代に活躍した浮世絵師・鳥山石燕が著した妖怪図鑑です。猫又やぬらりひょんなど人気の妖怪をはじめ、鈴彦姫や刑部姫などマイナーな妖怪、さらに『しゃばけ』シリーズでお馴染みの鳴屋や屏風のぞきも掲載されています。説明文はほとんどありませんが、それでも石燕の卓越した画力と画才によって表現された妖怪たちの、一匹一匹の個性の豊かさは、読み手を飽きさせることなく、妖怪に興味がある方もそうでない方も十分に楽しめる一冊となっております。
80	地域図書館	AO	『かわいい江戸絵画』	府中市美術館／編	求龍堂	本書は平成25年府中市美術館で開かれた「かわいい江戸絵画」展の図録を再編集したものです。開催中に完売となった図録が書籍化されたこと知り、手に取りました。「かわいい」という言葉は、日本を盛り上げるキーワード「クールジャパン」に含まれる要素として、しばしば取り上げられます。そもそも「かわいい」とは、どんなものかが、本書のはじめで論じられていて、その辺りも興味深いのですが、犬好きとしては、円山応挙の子犬のかわいさを論じた部分がおすすすめです。もちろん、解説を飛ばして、応挙をはじめとする「かわいい」絵を見ていくだけでも楽しめます。むしろ、主役はそちらです。もっと手軽に「かわいい」江戸絵画を楽しむなら、本書の執筆者の一人金子信久氏の『江戸かわいい動物』(講談社)もおすすすめです。
81	事業館	もぐさ	『そらみみ植物園』	西畠 清順／著	東京書籍	植物をくおそるべき才能をもった植物>、くイラッとする植物>、く残念な植物>等、ちょっと不思議な分類で紹介していく本。植物の挿絵とテンポのいい文章と紹介でサクサク読むことができます。いろんな植物に出会いながら、その植物にまつわる物語に耳を傾け、クツツとできる一冊です。植物に興味がある人は勿論、ない人にもおススメです。『そらみみ植物園』に続く第2弾、「はつみみ植物園」も是非、一緒に読んで頂きたい。
82	事業館	M	『京菓子と琳派』	濱崎 加奈子/監修	淡交社	2015年は、琳派の創始者の一人、本阿弥光悦が琳派の活動拠点となった京都鷹峯の土地を徳川家康から拝領して400年目の節目の年で、京都では、琳派にふれ、琳派を学び、琳派に親しむ、様々なイベントが実施されました。本書では有斐齋弘道館の館長である濱崎加奈子氏の執筆で、琳派に因んだ京菓子がとても美しく紹介されています。

# とっておきを届けたい 京都市図書館 司書のイチオシ！ (一般書・文学)

83	中央	たんぼぼ	『ラモックス』	R・A・ハインライン／著 大森 望／訳	東京創元社	スチューアート家にはラモックスという恐竜サイズの宇宙怪獣のペットがいます。ある日、ラモックスは暇をもてあましては隣家のバラと近所の野良犬をちよつとつまみ食いしてしまいます。町はたちまち大騒ぎ！話はどんどん大きくなり地元の損害賠償問題から星間外交へ・・・25年ぶりに読み返しましたがやっぱり面白くて紹介できると安心しました。SF初心者にもSFが大好きなあなたにもおすすめの一冊です。
84	中央	ottyi	『私のシベリヤ』	香月 泰男／著	筑摩書房	画家・香月泰男の名前を知らしめたのは自身のシベリア抑留体験を描いたシベリア・シリーズです。本書では過酷なシベリア抑留時代の体験が生々しく語られるのと同時に、シベリア・シリーズ作品の説明もなされています。彼が中国本土で見た日本人の赤い屍体と原爆の黒い屍体について語る箇所は、現在の日本人への問いかけでもあると思います。本書と彼の絵は、戦争を知らない私たちへ痛烈に語りかけられます。
85	中央	花水木	『春、戻る』	瀬尾 まいこ／著	集英社	結婚を間近に控えた主人公の前に、ある日突然「兄」を名乗る明らかに年下の男性が現れるところから、物語は始まります。彼の正体は・・・？著者独特のやさしく温かい、どこか飄々とした筆致で描かれていく2人の関係に、「気づかないうちに誰もが人から守られている」と感じられる心温まる一冊です。閉ざしていた辛い過去も、全てが今の自分へとつながる大切な経験。物語の最後、それに気づいた主人公の晴々とした姿に、思わず涙・・・
86	中央	若葉	『左京区七夕通東入ル』	瀧羽 麻子／著	小学館	学生生活を4年目に迎えた七夕の夜、文学部の花は数学科のキレツな彼と出会った・・・。京都を舞台に学生時代のにぎやかな時間や仲間たち、ゆるやかに育まれる等身大の恋が描かれています。鴨川デルタなど知っている場所もたくさん出てくるので親近感を覚えながら読むことができます。「こんな学生生活送って良かった」と感じられるエピソードが満載です。日頃の疲れを癒し、読み終わった後に元気になるような一冊です。
87	中央	如月想樹	『象の消滅』	村上 春樹／著	新潮社	ニューヨークで出版後、日本でも刊行された村上春樹の初期短編小説集です。個人的に一番のおススメは『パン屋再襲撃』という作品で、空腹のあまり深夜に目覚めてしまった夫婦が、パン屋を襲撃しに行くこととするおかしな話です。ある種「奇行」ともいえるこの夫婦の行動が、終始淡々とした文体で語られるのが滑稽で面白い、印象的な一作です。短編17作品が1冊に収録されていて、読みごたえもあり、秋の夜長にはぴったりの1冊かと思えます。
88	右京中央	H	『人間の土地』	アントワーン・ド・サン ＝テグジュペリ／著 堀口大樹／訳	新潮社	砂漠の真ん中に墜落し、水さえない中で歩き続けた飛行士は果たして遭難者でしょうか？サン＝テグジュペリは、否と言います。極限状態の中で、自分たちを探している人々こそが遭難者であると確信し、彼らのために歩き続ける彼ら。その原動力は何でしょうか？かつて『星の王子さま』を読まれた方に、ぜひ手に取っていただきたいのがこの作品です。責任、つながり、といった核となる言葉がさらに精錬されて現れており、両作品を緊密に繋いでいます。静かで深い、人間洞察です。
89	右京中央	T	『麗しき花実』	乙川 優三郎／著	朝日新聞出版	女性の身で、蒔絵の名工・原羊遊齋に師事した理野は、自分の表現を求め、すべてを蒔絵に注いでいきます。酒井抱一、鈴木其一など実在の人物が絡み、成熟した江戸文化の中、創作と制作の間で苦悩する職人の姿が、まざまざと描かれます。著者はこれ以降現代小説を執筆。時代小説では一つの集大成か、とも思える骨太な作品です。また、単行本には蒔絵のカラー写真、文庫本には続編が収録されています。
90	右京中央	K	『邂逅の森』	熊谷 達也／著	文藝春秋	大正時代の東北を舞台に、先祖の代から伝わるマタギとして厳しい山の掟にしたがって生きる一人の男の生涯を描いた小説。人と自然の対等な格闘に、ぞくぞくする迫力、臨場感が味わえると共に、命を相手に生きることのすさまじさが心身に重く響きます。読み進めるうちに、いつの間にか主人公と共に雪山を走り、自然の息吹に耳をすまし、人を愛し、生きる喜びを知る体験をしている、まさに読書の醍醐味を感じられる一冊です。
91	右京中央	F	『真珠の耳飾りの少女』	トレイシー・シュヴァリエ／著 木下哲夫／訳	白水社	日本でも人気の高いヨハネス・フェルメール。彼の代表作である「真珠の耳飾りの少女」のモデルはヨハネス家に勤める使用人の少女であった、という物語です。聡明な少女の目を通して描かれる17世紀オランダの情景と、「旦那様」の絵にのせられる色彩。衣服や装飾品への少女らしい興味と羨望が、フェルメール作品に描かれている女性たちの姿を鮮やかに想起させます。読み終わる頃には画集を開きたくなくなること間違いなしの一冊です。
92	右京中央	K	『李陵・山月記』	中島 敦／著	角川書店	高校生の頃、教科書に載っていて、繰り返し何度も読みました。狷介な性格から人喰い虎になってしまっても、自分の詩作を認められたい李陵。全く明るくはないのですが不思議なファンタジーです。彼の孤独や自己顕示欲の強さに自分を重ね、何度も読むことで自分の中の孤独も癒されたように感じました。山月記を面白いと思ったことで、中国小説や時代小説にも読書の幅が広がった、きっかけの1冊です。

93	右京中央	YF	『ダイブ』1～4	森 絵都／著	講談社	飛び込みでオリンピックをめざす少年たちの物語。主人公の一人、知季がまっすぐにどんどん成長していく様子、高校生ダイバーたちの悩み・葛藤など、登場人物全ての心理描写が分かりやすく、ぐいぐい引き付けられます。普通の学生生活を放棄してまでもストイックに自分と戦う少年たち。期待への重圧などそれぞれがたくさん背負った中でオリンピック最終選考会。誰がキップを手に入れるのか…。きらきらまぶしい青春ドラマです。
94	右京中央	も	『はたらく魔王さま！』	和ヶ原 聡司／著	アスキー・メディアワークス	別世界の魔界より、現代社会に堕ちてきた魔王が戸籍の取得から始めてファストフード店アルバイトの正規雇用制度を利用して正社員を目指して頑張るという、ライトノベルならではの物語が魅力です。弱体化した魔王がその王たる資質を発揮して、現代社会で今一度世界征服を志し、ハンバーガー店の正社員を目指す姿に社会経験の尊さを感じます。魔王が一瞬だけ力を取り戻したときの魔王らしい圧倒的な強さも魅力です。
95	伏見中央	Shneemann	『夜のサーカス』	エリン・モーゲンスターン／著 宇佐川晶子／訳	早川書房	忽然と現れ、夜にだけ開かれるサーカス。白と黒の世界の中で繰り上げられるショーは、観客を魅了する。しかしそのサーカスは、若き魔術師シーリアとマルコの、戦いの場でもあった。戦う相手も知らぬまま、戦うことを運命づけられた二人。最後に待ち受けるものは…。非現実的な世界のはずなのに、サーカスも登場人物も本当に存在しているように思えてくる、不思議な物語です。
96	伏見中央	K. K	『家守綺譚』	梨木 香歩／著	新潮社	売れない物書きをする主人公は、学生時代亡くなった親友の実家の家守を頼まれる。ある日、床の間の掛け軸から音がし、絵が動き、船が近づいてくる。船には親友が乗っていて、庭のサルスベリがお前に惚れていると言う。親友は度々訪れ、他にも河童が流れてきて、飼犬が滝壺に戻しに行ったりと不思議な日常が始まる。フィクションだが、自分も田舎に行ったようにすっと入り込め、穏やかで心地良い気分にならせてくれる小説。
97	伏見中央	春の奈良	『宇治拾遺物語』	町田 康／訳	『日本文学全集8』池澤夏樹／個人編集 河出書房新社より	学校で習った覚えのある『宇治拾遺物語』。この本を読んでも、教科書には載っていなかった愉快な話やばかばかしい話がたくさんで、昔の人は色々な意味でおおらかだったのだなあ…と思わせる。話に出てくる人物の感情やセリフがためらいなく現代の言葉で描かれているため、滑稽さも倍増。おじいさんの瘤を取るポップでロックな鬼たちや、鼻のムチャクチャ長いお坊さんがオネエ言葉で激怒する様子に大笑いしてしまうこと間違いなし。
98	伏見中央	T. N	『ぶたぶたの本屋さん』	矢崎 在美／著	光文社	ブックカフェを営み、おすすめの本を紹介するラジオ番組に出演している渋い声の中年男性。様々な悩みを持つ人が彼と出会いますが、実はその外見はとってもかわいいブタのぬいぐるみで…。現在23冊ある「ぶたぶたシリーズ」のうちの一冊です。和菓子屋さんや獣医さんなど、様々な職業のお話があります。特に料理系は本当においしい！皆がその外見に驚き、次第に受け入れていく様子がなんともおかしいです。ぶたぶたの人柄(?)が素敵です。
99	伏見中央	うかんむりの女の子	『うかんむりのこども』	吉田 篤弘／著	新潮社	言葉は美しいと思う。漢字一字に含まれる意味の深さが果てしない。奥ゆかしく意味を秘めた文字を前にすると謙虚な気持ちになる。このエッセイ集を読んだ率直な感想だ。文字に対する著者の巧みな観察によって、各章が壮大なストーリーとなっている。読者は文章に酔いしれ、思わず上手い！と拍手してしまうだろう。笑ってしまうかも知れない。ところで、「うかんむりのこども」って何だ？うかんむりという煌びやかな冠を載せた文字を眺めたところで、この本のはじまりはじまり。
100	醍醐中央	あかね丸	『チア男子！！』	朝井リョウ／著	集英社	人を応援することで、主役になる。大学界初の男子のみのチアリーディング部を描いた青春スポーツ小説です。はじめこそ初心者の集まりだった男子チア部が、メンバーの秘密やそれぞれの思いを分かち合うことで、結束し、ついに目標は全国選手権出場へ！チアリーディングについての知識を得られるのはもちろん、個性豊かなキャラクターのやりとりにも注目していただきたい一冊です。
101	醍醐中央	曇りのち晴れ	『笑顔千両 ウエザ・リポート』	宇江佐 真理／著	文藝春秋	著者は、昨年惜しまれつつこの世を去った時代小説作家。図書館でも人気の高い『髪結い伊佐次捕物余話』シリーズ等、江戸の庶民をいきいきと描いた作品の創作の場は、意外にも函館の自宅の台所でした。大工の妻として母として、朗らかに生きた著者の日常が垣間見えるエッセイです。カバー表紙にも注目を。函館の景色を背景に洗濯物を干す丸髷の女性、どうやら著者ご本人のようです。イメージ通りかは、ぜひ本書でお確かめください。
102	醍醐中央	トト	『今日も一日きみを見てた』	角田 光代／著	角川書店	小説家、角田光代が漫画家の西原理恵子宅より譲り受けたアメリカン・ショートヘアの子猫トトとの生活を綴ったエッセイ。心臓病のために毎日飲むことになった薬も嫌なことなくちゃんと飲み、とても辛抱強いトト。夜眠る時は角田氏の左脇に顎を乗せて眠る。右脇には絶対入らないというこだわり。慎重で運動音痴でさみしがりのトトと、トトを見守る著者のやさしいまなざしが、とてもすてきなエッセイです。
103	地域図書館	ノコ	『神去なあなあ夜話』	三浦 しをん／著	徳間書店	現代っ子 平野勇気が三重の山奥・神去村の林業に従事して2年。『神去なあなあ日常』の続編です。勇気の見線を通して知る神去村の暮らしや不思議にますます引き込まれていきます。今回は勇気の恋が進展！？少しずつ大人になっていく勇気を微笑ましく思いつつも、周囲の良き人たちと神去村の出来事についてツツコミを入れてしまいます。涙あり笑いあり、読んでよかったと思える本です。
104	地域図書館	大文字	『恋文』	阿久 悠／著	文化出版局	偶然耳にした「恋文温泉」の朗読。途中から聞くと気になり読んでみたくなった作品です。失恋した女性がひなびた温泉地を訪れ、相手男性に未練がましい手紙を綴ります。その手紙によって人生思わぬ方向になり女性は幸せを手に入れます。数年経って訪れた同じ温泉地でまた手紙を書いています。今度はどんな思いを綴っているのでしょうか。「恋文」にまつわる24の物語で素直に思いを伝える手紙の魅力を感じました。

105	地域図書館	千	『警官嫌い』	エド・マクベイン／著 井上一夫／訳	早川書房	「市はきらめく宝石のケースのようだ。輝く明かりのかげには街がある。街にはごみもあるのだ」。警察小説の始祖にしてハードボイルドの秀作、群像小説の嚆矢。優れた風俗描写に魅力的な謎。そして、影なる主人公「アイソラ」の街の風景…。『87分署シリーズ』の記念すべき第一作、ここからはまってみませんか？
106	地域図書館	101匹子猫	『ヌレエフの犬』	エルケ・ハイデンライヒ／作 三浦美紀子／訳	三修社	世界的に有名なバレエダンサー、ヌレエフが飼っていた犬、オプロモフ。足が短く太っていて、怠惰な性格のこの犬はしかし、ヌレエフのバレエのレッスンを眺めながら、芸術への理解と憧れを深めていく。ヌレエフの死後、オプロモフの世話を引き受けたピロシュコヴァだけが目撃した、彼の驚くべき秘密とは…。読後に思わずため息がもれる、美しい奇跡の物語です。
107	地域図書館	銀杏	『春にして君を離れ』	アガサ・クリスティー／著 中村 妙子／訳	早川書房	意外なことに犯人も探偵も登場しない、クリスティーが別名で書いた小説。旅先で悪天候のため足止めをくらった主人公が、なすことも無い中、今までの人生を見つめ直していく、そこで発見した事実とは…。現在は絶版ですが、旧版の「訳者あとがき」に「キルケゴールの『死にいたる病』の一節を思い出して、人ごとならず身に沁みたとあつたのが、本書を読むきっかけとなりました。ミステリーは読まないと言う方もこれは是非！
108	地域図書館	アリスのうさぎ	『もらい泣き』	冲方 丁／著	集英社	震災で自らも避難生活を送りながら、郵便を配達し続けた郵便局員。彼の誕生日に届いた、彼の名を持つ星の承認書は、震災で星になった妻からのプレゼントだった。「泣ける話」というテーマで、著者が周囲の人々の秘められたエピソードを元に、修正・創作を加えたショートストーリー集です。涙もろい方は、電車の中で読まないでください。
109	地域図書館	ジュウシマツ	『グリーン・レクイエム／緑幻想』	新井 素子／著	東京創元社	「グリーン・レクイエム」は第12回星雲賞日本短編部門受賞作品です。著者新井氏が19歳から20歳にかけて書いたお話とのことですが…とてもとても深い内容です。初めて読んだ10代の時・そして20代・30代・40代と読んでいますが、いつもどっぷりハマります。長い緑の髪の娘・明日香。その髪の意味・彼女の正体は…。『緑幻想』は続編です。文章表現・発想力とても独特で心の奥に入ってきます！
110	地域図書館	花影 結衣	『下鴨アンティーク [1] アリスと紫式部』	白川 紺子／著	集英社	京都下鴨川の森の近くに住む高校生の鹿乃は、旧華族である野々宮家の娘で、両親を早くに亡くし、育ててくれた祖母も亡くなってしまった現在は、兄の良鷹と兄の友人で下宿人の慧と三人で暮らしている。そんなある日、「開けてはいけない」と言われていた蔵を開けてしまう。すると、次々に不思議なことが…中学生から高校生向きの本ですが、年配の方が読まれても楽しめる作品です。
111	地域図書館	千里	『関ヶ原』上・中・下	司馬 遼太郎／著	新潮社	豊臣秀吉の死後、虎視眈々と天下を狙う徳川家康に対し、自分の命に代えても豊臣家を守ろうとする石田三成。二人の権謀の渦中に巻き込まれていく戦国武将たち。己はどちらにつくのが有利なのか、のるかするかの天下分け目の戦い。武将たちの駆け引きの心理戦は、本戦の「関ヶ原の戦い」よりも熱く面白い。歴史に「もしも」という言葉があるならば、時代はどう変わっていただろうか。
112	地域図書館	やまさん	『ここに地終わり海始まる』上・下	宮本 輝／著	講談社	この不思議なタイトルは、ポルトガルのロカ岬にある石碑に刻まれた詩の一節である。ユーラシア大陸の最も西のはての岬から、ある日、志穂子のもとに気づかぬ青年の絵はがきが届く。その絵はがきは、6歳から18年間、病院での療養生活を続けた志穂子の心に奇蹟をもたらした。志穂子を温かく見守る家族、ぶつかりながらも本音で語る友達、さまざまな人との交わりと志穂子の心の成長を描く物語。
113	地域図書館	花子	『決壊』上・下	平野 啓一郎／著	新潮社	著者 平野啓一郎は京都大学法学部在学中の1999年に『日蝕』で当時最年少の23歳で芥川賞を受賞。ここで紹介する『決壊』上・下はそれから9年後の作品です。弟が事件に巻き込まれ、その事件の被疑者となってしまふ兄。最後は真犯人が見つかり、疑いは晴れますが、何とも救われない結末をむかえます。いじめ、ネット社会、マスコミのあり方など、現代社会の問題を提起している作品だと思います。
114	地域図書館	ブヒ丸	『ぶたぶたの食卓』	矢崎 在美／著	光文社	一人暮らしを始めて2か月、初めて入った中華料理店で、由香は13年前に死んだ祖母の作ってくれたものと同じ味のチャーハンに出会う。「なんで？ どうして？」 見た目はかわいいうぬいぐるみ、中身は心優しい中年男「山崎ぶたぶた」が、人々の疲れた心を癒してゆきます。シリーズの多くは短編でできています。『再びのぶたぶた』にも関連作品が掲載されていますので、併せてオススメです。
115	地域図書館	庭野草刈人	『窓から逃げた100歳老人』	ヨナス・ヨナソン／著 柳瀬 尚紀／訳	西村書店	2016年夏に翻訳家柳瀬尚紀が亡くなった。「不思議の国のアリス」。「チョコレート工場の秘密」の翻訳で有名です。スウェーデン発の世界的ベストセラーを柳瀬さんが翻訳された。「窓からにげた100歳老人」というタイトルも、内容も思わず吹き出してしまふ。「ありえないけどこんなことあれば嬉しい！」が最後まで盛々。主人公の「人生なんとななるものさ」のペースにどンドン引き込まれていく。最後は超めでたしめでたしで終わらせちゃうハチャメチャ物語。
116	地域図書館	H	『サクリフェイス』	近藤 史恵／著	新潮社	舞台は自転車ロードレースの世界。ロードレースは完全にチーム戦で、「エース」と「アシスト」に分かれます。「アシスト」はどこまでも「エース」のために尽くし、「エース」を勝利へと導く。プロのロードレースチームに所属する白石誓は、「アシスト」として仲間やライバルたちと切磋琢磨する中、ヨーロッパ遠征中に悲劇に遭遇してしまう。単なる事故か、それとも…。事故の真相が明らかになると、タイトルの真の意味に震えました。

117	地域図書館	赤影参上!	『鴨川食堂』	柏井 壽／著	小学館	東本願寺にそんなお店、あるのかな？ 読み進むごとにそんな思いが募ります。 京都・グルメ・ペット。今の人たちが気になるものが詰まった『鴨川食堂』。 馴染みのある“出町柳”や“北大路”など事あるごとに出現。ひょっとして？ 知っている人が出てくるのかな？ と思える場面が、そくそく。三十路の“こいし”とお父ちゃんを軸にテンポの良い京都弁。流石は柏井さん。お客さんが来店するたびにお任せ定食が。「このランチ、食べたいなあ。」と思いつく場面は展開する。来店者の思い出の“ナポリタン”や“肉じゃが”を捜すお父ちゃん。テレビ化されたのも頷ける。お腹が空いている時に読むのは要注意。是非是非、続巻の“おかわり”“いつもの”も食べてみてください！！
118	地域図書館	R	『銃 口』上・下	三浦 綾子／著	角川書店	この小説は、昭和の戦争へ突入する時代に、一人の青年が恩師に憧れて小学校の教師となりますが、理想の教育を目指す中、綴り方(作文)教育で、ある日突然警察に連行されるという実際にあった北海道綴り方教育連盟事件を題材に、昭和と戦争について描いた作品です。軍国主義の中にあつて、主人公や周囲の登場人物の生き方に引き込まれます。戦後71年目を迎える今、ぜひ読んでいただきたいおすすめの本です。
119	地域図書館	いく	『針の眼』	ケン・フォレット／著 戸田 裕之／訳	東京創元社	アドルフ・ヒトラーが信頼し、その報告に直々に目を通すというスパイ、ヘンリー。連合軍の上陸地点を探り当てたヘンリーは、戦争の勝敗を決する情報を確実にヒトラーに報告するためにUボートの待つ北海を目指す。嵐に閉ざされた島の住民は車いすの夫とその妻、夫婦の幼い子どもと老いた羊飼いだけ。その島に漂着したヘンリー。迫る英国陸軍情報部。祖国を救った「英雄」とは誰なのか？
120	地域図書館	めい	『つむじダブル』	小路 幸也／著、宮下奈都／著	ポプラ社	この作品は「東京バンドワゴン」シリーズの著者、小路幸也と2016年本屋大賞を受賞した「羊と鋼の森」の著者、宮下奈都の共著です。高校生の兄と小学生の妹の各パートを執筆、それぞれの視点から書かれているがまるで一人の著者によって書かれているかのようで、共著だと言われなければ全く分からないほどスムーズに物語は流れていきます。柔らかい文体でとても読みやすい作品です。
121	地域図書館	ブックレンジャー100号	『ばけもの好む中將 1』	瀬川 貴次／著	集英社	舞台は平安時代。主人公の宗孝が、「本物の怪異を見てみたい。」という変人中將の宣能に振り回される物語です。ある出来事から宣能に気に入られた宗孝は、怖がりなのに宣能の怪異探しに連れまわされ、予想外の事件に巻き込まれてしまいます。その事件を二人で力を合わせて解決するために右往左往する宗孝が面白いです。また、宗孝には十二人の個性的な姉がいて、魅力あふれる登場人物が多く、楽しく読める作品です。
122	地域図書館	S	『転生』	篠田 節子／著	講談社	1989年、パンチエンラマ十世が謎の死をとげ、金色のミイラとしてチベットのタシルンポ寺院に収納される。それから十数年後、寺院の小僧ロブサンが霊塔に入ると、ミイラは突然動きだしロブサンについてくるが、女と食べ物に意地汚く愕然とする。しかし、中国政府に追われるミイラと、何故かチベットを救うための危険な旅へ出ること！？ チベットの壮大な景色が目に見え、宗教ものでファンタジー、でもドタバタ喜劇です。
123	地域図書館	SY	『陸奥爆沈』	吉村 昭／著	新潮社	1943年6月8日、柱島泊地(山口県岩国市)の旗艦ブイに繋留中の戦艦「陸奥」が大爆発を起こし、瞬間に沈没した。それから、26年。柱島を訪れた著者が「陸奥」爆沈の謎に迫っていくノンフィクション作品です。爆沈原因として、魚雷攻撃や兵器の暴発の可能性も検討される中、やがて一つの可能性に突き当たっていく。それは戦争が人々の心に与えた闇だったのか。少しずつ明らかにされていく事実、著者の真摯な取材力を感じる作品です。
124	総務課	孤島の馬	『颯風(くふう)の王』	河崎 秋子／著	KADOKAWA	東北・北海道を舞台に、世代を超えてつながる一族と馬の深い絆の物語。ページをめくると美しくも厳しい自然が目の前に広がり、吹渡る強く激しい風を感じます。人の努力も願いも「オヨバヌ」自然の中で、文字通り馬の血肉によって生かされた命、馬と共に懸命に生きた家族。そして現代を生きる子孫、ひかりが出した結論。いま生きていることの尊さを改めて考えさせられます。ところで、著者は羊飼いなんですって！
125	総務課	つかえるくん	『銀河英雄伝説』	田中 芳樹／著	東京創元社	「銀英伝」の呼び名で親しまれる、SF叙事詩です。魅力的なキャラクターに引き込まれ、大スケールの艦隊戦に胸躍らせ、時には先の見えない陰謀に手に汗握り、全10巻、外伝5巻という大長編ながら、あつという間に読み進めてしまいました。続きが気になりますが、読み終えてしまうのは何だか惜しい、そんな気持ちになった作品です。星野之宣氏の表紙イラストもカッコいいので、手に取ってみてください。
126	総務課	つばめとび	『小説・捨てていく話』	松谷 みよ子／著	筑摩書房	「モモちゃんとアカネちゃん」シリーズのママの物語が私小説として描かれます。ママのもとに死神が来たり、パパとさよならすることになったり…そんな不穏な空気を幼心に覚えている方も多いのでは？ 濁った沼の中でもがいていたママは、ついに沼から飛び出しますが、パパとのつながりが途絶えることはなくて…それは夫婦の情愛か、はたまた戦友の絆か。大人のテーマが軽やかな文体で描かれますが、想いが浄化するために経た年月を感じずにはいられません。
127	総務課	つかえるくん2号	『翼を持つ少女 BISビプリオバトル部』	山本 弘／著	東京創元社	ビプリオバトルをご存知ですか？ 京都市図書館でも開催している「知的書評合戦」。紹介者の感情フィルターを通して語られた本の魅力に引き付けられる、奥深いゲームです。そんなビプリオバトルを通して友情と少しの恋心を育む、学園ストーリー。個性的な登場人物が、ビプリオバトルの本当の面白さを教えてくれます。主人公の趣味として語られる、著者らしいマニアックなSF本紹介もたまりません！

128	総務課	ほしぞら	『若冲』	澤田 瞳子／著	文藝春秋	初めて彼の作品を見たとき、息を呑んだ。このきらびやかな絵に、絵の中の動植物たちに完全に心を奪われた。そしてこの画家を知りたいと思った。画家の名は伊藤若冲。小説として取り上げられることは少なかつたが、小説の主人公として澤田瞳子氏を取り上げた。絵の中で生き物の命の尊さを思う優しい心、そして別の心で何を見ていたのか若冲の心の葛藤を慮ることはできないが、フィクションとして罪と向き合っていたとするその内を考えさせてくれる作品。
129	事業館	ちゃそ	『クリスマスキャロル』	チャールズ・ディケンズ／著	春風社	守銭奴が3人の霊によって生き方を変えていく有名なストーリー。子どもの頃はただ怖面白かつたが、今読み返してみると、その頃には理解できなかったことや違った読み方ができることに気づきます。特に2番目の霊が連れてくる二人の子ども「無知」と「貧困」が、この世の諸悪の根源とする作者の投げかけに、改めてこの物語の深さを感じます。
130	事業館	K	『戦争と平和』1・2・3	トルストイ／著 米川 正夫／訳	岩波書店	タイトルと古典的名作という肩書で損をしている本だと思います。色々な国と陸でつながっているロシアが舞台だからこそ、顔の造作の表現が豊かです。鼻の形など、こんなにいろんな表現があるのか！と楽しめること間違いなしです。また、美少女と貴族の年の差カップルなどもいて、恋愛小説としても楽しめますよ。
131	事業館	@64842	『富士山頂』	新田 次郎／著	文藝春秋	昭和38年、台風観測の砦・気象レーダーを富士山頂に設置する事業が動き出した。人工物を寄せつけぬ地形、「空のローレライ」と言わしめた悪気流、暴風雨など過酷な気候下で作業可能な時間は、1年でわずか40日間。一世一代の大仕事に命と誇りを賭けた鬼気迫る人々の姿を追った、迫真の作品！ 生半可な企業小説やドラマに食傷気味の方、是非おすすめて。ちなみに、NHKドキュメンタリー「プロジェクトX挑戦者たち」に実録あり。併せて見れば感銘必至。
132	事業館	ラベンダー	『人生には何ひとつ無駄なものはない』	遠藤 周作／著	海竜社	人生で悩んだり、行き詰まったりした時に支えや道標となる言葉が集められています。挫折や苦悩等の経験に基づいた重みのある言葉で的確に書かれており、気づかされたり、励まされたり、前向きになれるきっかけとなります。「人生には、何ひとつ無駄なものはない」という捉え方は、希望的であり、多くを経験した悟りの境地すら感じられ、違った視点からの見方を教示しています。胸に響き、人生を見つめ直すのきっかけとなる一冊です。
133	事業館	Iolite	『カブキブ！』	榎田 ユウリ／著	KADOKAWA	高校生の部活を題材にした小説は沢山ありますが、なかでも伝統芸能の「歌舞伎」をテーマにした作品です。歌舞伎と言われると、なかなか敷居が高い感じがしますが、そこは学生の部活もの。作中に演目解説や聞いたことのあるセリフが出てきて、歌舞伎の知識がなくても、スピーディな展開に引き込まれていきます。歌舞伎が大好きな主人公と、かなり個人的な部員たちの青春物語です。
134	事業館	Y. K	『アメリカ素描』	司馬 遼太郎／著	新潮社	司馬遼太郎氏が1980年代のアメリカを旅した時の旅行記です。観光地には目もくれず、ベトナムや韓国の移民街を訪ね、サンフランシスコではゲイカルチャー取材し、カルフォルニアでWASPを探したかと思うと、ワシントンでは小村寿太郎の腰かけた椅子に座ってみるという具合で、まったく統一性はありませんが、著者独特の感性により、抜群に面白いアメリカ文化・文明論となっています。